招聘研究員

氏　　名	デボラ フェルナンデス タバレス（Débora Fernandes TAVARES）
所属機関等	サンパウロ大学　日本文化研究所
受入期間	2019 年 12 月 2 日～2019 年 12 月 22 日
指導教員	小熊誠（チューター：加藤里織／山田妃奈乃）
研究課題	日本の児童の詩（俳句）の習得におけるリズム、音楽性、および絵画について

日本の俳句、ブラジルの俳諧

デボラ・フェルナンデス・タバレス

ブラジル人研究者は、ブラジルで最初に俳句を詠んだ日本人は上塚周平（1876～1935）だと考えている。上塚（俳名「瓢骨」）は 1908 年にブラジルへ渡った日本人移民である。

涸滝を見上げて着きぬ移民船

A nau imigrante
Chegando: vê-se lá do alto
A cascata seca
（MASUDA 1988：33）

瓢骨に次いで、日本人移民の俳句指導者として重要な人物は佐藤謙二郎（1898～1979）である。俳名を念腹といい、高浜虚子（1874～1959）の弟子である。Mendonça（1999）によると、高浜虚子は、俳句普及の使命を帯びてブラジルに出立する念腹に、次のような句を詠んで贈った。

東風の船着きしところに国造り

Faça um país de poesia
Aonde leve esse navio
Vento de primavera

鍬取って俳諧国を拓くべし[1]

Lavrando a terra
Plante também
Um país de haikai
（MENDONÇA 1999：114）

念腹は日本人移民と共にブラジルで俳句をつくった。日本語で俳句を詠んできた弟子の数は数千人に及ぶ。文化や気候風土、言葉が全く異なる異国の地で懸命に働くことは日本人移民にとって決して容易なことではなかった。こうした状況にあって、俳句は故国日本への郷愁の象徴としてだけでなく、夏の日の一服の涼風のように慰めであったに違いない。念腹はこれについて『念腹句集』（1953）のなかで次のように書いている。「しかし、俳句こそは私の生命のやうなものだ。今、この二十五年を振り返ってみても、先には過労のために、後には戦争のために句の作れなかった時もないではなかったが、ともかくも俳句によって慰められ励まされて、僅かに生き甲斐を感じて来たとしか考へられん。」（https://www.kakinet.com/caqui/nempukug.shtml）。

日本人移民が俳句に寄せるこうした思いは岡田茂吉（1882～1955）の芸術観と一致するようである。岡田は日常生活における芸術の重要性についてこう述べている。「芸術が人間の暮らしに必要不可欠であることは万人が承知している。芸術が存在しなければ、生活は無味乾燥なものとなるだろう……（略）世界は確かに自然や人間の手によって創造された芸術である」（岡田 2019：84）。

念腹の弟子の一人に増田秀一（1911～2008）がいた。

◉芭蕉記念館の庭

◉芭蕉記念館の庭にある芭蕉像

◉元町近辺で行われた吟行。季語は「サンタクロース」

増田（俳名「恒河」）は 18 歳でブラジルに渡り、ブラジルにほれ込んだ。長年にわたり念腹先生と連絡を取り、教えを乞うた恒河は大仕事に取り組んだ。ポルトガル語で俳句をつくることである。

1987 年、恒河は「Grêmio Haicai Ipê」（グレミオ・ハイカイ・イペー）を設立した。33 年間、俳諧という三行詩について学び、ポルトガル語で俳句を詠んできたグループである。Grêmio Haicai Ipê は毎月サンパウロ（ブラジル）で会合を開いている。現在は、恒河の姪で、恒河に俳諧を学んだテルコ・オダ（1945〜）が主宰となり、ブラジルにおける俳諧の普及に大きく貢献している。

Grêmio Haicai Ipê は松尾芭蕉（1644〜1694）一門を範とし、俳諧を詠む際には以下を原則としている。

- ✓ 五七五のリズムの三行詩とする
- ✓ 季語を入れる
- ✓ 簡潔
- ✓ あからさまに説明しない
- ✓ 客観的な言葉
- ✓ 現在を中心に据える

最初の移民がブラジルに到着してから百年以上が経ち、何千人ものブラジル人が俳諧を詠んでいる。ブラジルの学校には俳諧を教えるところもあり、大勢の子どもたちが地域の俳諧大会や国際俳句コンテストに参加している。

現在の日本で俳句がどのように実践されているか、その状況に少しばかり触れたのは、ブラジル俳諧の研究にとって貴重な経験だった。

読者の皆さんには俳句教室や句会について詳しく紹介し、知識を提供するとともに、句会などの雰囲気に浸ったり、詩の重要性を感じてもらったりする機会にしていただきたいと考える。

芭蕉記念館（東京）のある土曜日の朝。疋田丈晴先生と二人のアシスタントにより毎月恒例の俳句教室が始まった。対象は 8 歳から 11 歳の生徒。和室の教室に子どもたちが輪になって座っている。控えの間には、様子を見守る親御さんもいれば、一緒に教室に参加する親御さんもいる。親子で楽し気に話しながら俳句について学んでいる。

先生は笑みを浮かべ、気さくな調子で話しているが、生徒の関心を引くように授業を進めている。美しい色の短冊二枚と冬の季語の写真が子どもたちに配られ、グループに分かれて話し合う。

次は記念館の庭を一巡りする。冬の季語を探して、それをヒントに俳句をつくる。庭は小さいながらも紅葉、寒菊、椿、松など自然にあふれている。子どもたちはその美しい庭を自由に歩き回る。庭に点在している松尾芭蕉（1644〜1694）の俳句も、生徒が俳句を詠むヒントだ。

教室に戻った先生は、五七五の三行詩の構造、俳句の簡潔な言葉、季語など、俳句づくりについての説明を済ませると、子どもたち一人ひとりに声をかける。それが

◉山手イタリア山庭園での吟行

◉山手イタリア山庭園で句作する日本伝統俳句協会の俳人

◉日本伝統俳句協会のグループの句会

終わると、子どもたちが詠んだ句を投票で選ぶ。

講習終了後、生徒や親御さんからブラジルの俳句づくりの状況について質問がでた。ブラジルで大勢の子どもたちが俳句をつくっていることに、みんな驚いていた。ブラジル語の俳諧の本を何冊か教室で紹介した。

生徒たちは俳句教室に夢中で取り組んでいた。俳句をつくり、書き方を練習するだけではない。自然に触れ、冬の季語について学び、題材を自分で選び、他の生徒と話し合い、イメージをつくりあげ、句を選ぶ過程で各自の考えを述べ、創造力も発揮する機会がある。

メルロ＝ポンティ（1908〜1961）によると、「私の目に見えるものが世界ではない。私が体験することが世界である」（ポンティ　2018、英語は筆者訳）。詩作は一人ひとりの自らに対する認識や世界認識を広げ、深めてくれる。

創作体験は生徒に自分を磨き、殻を破り、成長する機会を与える。Fayga　Ostrower（1920〜2001）は、物事を創造する過程で、「……我々は精神的に成長し、人生に対する我々自身の姿を展開する」（Fayga　2017：28）と言っている。

創作を体験したのは日本伝統俳句協会のグループとの会合だった。グループを主宰する小川みゆき先生によると、日本伝統俳句協会は高浜虚子の孫娘にあたる稲畑汀子（1931〜）により60年前に設立されたもので、先生のグループはこの協会に所属している。

会合は山手イタリア山庭園での吟行から始まった。小川先生をはじめとする一行は見事な庭園や建物を鑑賞。先生は自然に対する鋭い目で、風景にある冬の季語を取り上げて説明してくださった。説明を終えると、庭園の草木の間で俳句をつくるよう参加者に促された。

句をつくった後、一行は元町通りを散策し、周辺を見て回った。参加した俳人の一人は「俳句はどこでも、どんな状況でも詠むことができる」と述べていた。

場所を神奈川近代文学館に移し、句会が午後3時に始まった。立派な和室に女性11人の参加者がそろった。平均年齢50歳。和気あいあいとした雰囲気だ。

それぞれが五句ずつ詠み、私の俳句は小川先生が英語から日本語へ翻訳してくださった。五句は短冊に書いてまぜ合わされた。参加者はすべての句に目を通し、五つ句を選び、その五句から最優秀の一句が選ばれた。

小川先生はすべての句に目を通すと、意見やアドバイスを述べて、手直ししてくださった。また、それぞれの俳句について、五七五のリズムや、季語、その句から感じられることをやさしく指摘してくださった。

冬の午後
句仲間街に
サンタは屋根に

Winter Afternoon
Haijin friends on the street
Santa Claus on the roof

この句は、その独創性から、午後の吟行の最優秀作品

に選ばれたものである。また、この句は、どこでも、どんな状況でも俳句を詠めるということを示している。

日本伝統俳句協会の句会は、ブラジルの俳諧グループ「Grêmio Haicai Ipê」の句会の進め方とほとんど同じである。違うのは吟行だ。Grêmio Haicai Ipê の毎月の集まりでは吟行を行わない。主宰者から課題として三つの季語が出され、翌月に、その季語を用いて最低三句をつくり持ち寄ることになっている。Grêmio Haicai Ipê で吟行が行われるのは年一、二回程度。ブラジルで秋に当たる 4 月に行われる「月見の会」のような特別な集まりで行われる。

日本人は句作について五七五のリズムや吟行などの伝統を守っているが、諸外国では事情が異なっていることが分かる。神奈川大学の図書資料を調べたところ、米国の俳句書やその著者のなかには、五七五のリズムや季語といった伝統的な俳句のきまりに従わないものもいることが分かった。俳句に題が付いていることもある。

日本ではブラジルの俳諧に対する関心が高まりつつある。2019 年には久冨木原玲先生により「ブラジル国際 HAIKAI 研究会」(International Brazilian Haiku Association) が設立された。ブラジル人研究者も会員としてこの研究会に参加している。

同研究会の 12 月の会合（東京）では、世界の俳句について議論が行われ、英国や米国など諸外国における句作の多様性についても言及された。『国際歳時記における比較研究―浮遊する四季の言葉』（東、藤原 2012）にもブラジルの俳諧の研究が収録されている。

諸外国の俳句についてはさらなる研究が必要であるが、日本がまいた俳句の種が世界中に広がり、芽吹いてさまざまな花を咲かせているのは確かである。

【注】

1「東風の船着きしところに国造り　鍬取って国常立の尊かな　畑打って俳諧国を拓くべし」（参考サイト『ブラジル移民文庫』「俳句 115」）とするケースもある。（編集者注）

【参考文献】

東聖子，藤原マリ子編 『国際歳時記における比較研究―浮遊する四季のことば』東京：笠間書院，2012

MASUDA, Goga. *O haicai no Brasil.* São Paulo: Editora Oriento, 1988

MENDONÇA, Maurício A. *Trilha forrada de folhas – Nenpuku Sato, Um Mestre de Haikai no Brasil.* São Paulo: Edições Ciência do Acidente, 1999

OKADA, Mokiti. *Ensinamentos de Meishu-Sama* vol. 5. 6th edition. São Paulo: Fundação Mokiti Okada, 2019（日本語版：岡田茂吉『天国の礎』）

OSTROWER, Fayga. *Criatividade e processos de criação.* Petrópolis: Editora Vozes, 2017

PONTY, Maurice M. *Fenomenologia da percepção.* São Paulo: Martins Fontes, 2018

SATO, Nenpuku. https://www.kakinet.com/caqui/nempukug.shtml. 2020 年 2 月 1 日閲覧

佐藤念腹『念腹句集』東京：暮しの手帖社，1953

Haiku in Japan, haikai in Brazil

Universidade de São Paulo　Débora Fernandes Tavares

Brazilian researchers consider Shûhei Uetsuka (1876–1935), whose *haimei* was Hyokotsu, the first Japanese immigrant to come to Brazil in 1908 and compose haiku:

Karetaki o miagete tsukinu iminsen

A nau imigrante
Chegando: vê-se lá do alto
A cascata seca
(MASUDA, 1988, p. 33)

After him, the most important Japanese haiku sensei immigrant was Kenjiro Sato (1898–1979), whose *haimei* was Nenpuku. He was a disciple of Kyoshi Takahama (1874–1959) and according to Mendonça (1999), Takahama would have composed the haiku below and given to Nenpuku before his departure to Brazil the mission to spread haiku in Brazil:

Kochi no fune tsukishi tokoro ni kunizukuri

Faça um país de poesia
Aonde leve esse navio
Vento de primavera

Kuwa totte haikai-koku wo hirakubeshi

Lavrando a terra
Plante também
Um país de haikai
(MENDONÇA, 1999, p. 114)

Nenpuku practiced haiku with the Japanese immigrants in Brazil and formed thousands of disciples who have composed the poem in the Japanese language. Working hard on a foreign country, with so different culture, weather and language was surely not an easy task for the Japanese immigrants. In this scenary, haiku should be not only one of the Japan memory symbols but also a comfort, like a fresh air on a summer day. Nenpuku would have written about it on his haiku anthology dated from 1953: "Haiku has been my life for the last 25 years, even when I couldn't compose it due to the tiresome hard work. This way, I considered haiku to be the joy of my life and I was consoled and encouraged by it" (https://www.kakinet.com/caqui/nempukug.shtml - our translation).

Mokichi Okada (1882–1955) concept of Art seems to conform with this important Japanese immigrant feeling when he states the importance of Art on the daily life: "Everybody knows how much art is necessary to the human life. If it didn't exist, life would be dry and monotonous (…) The world is really an art created by the Nature and by the human being hands." (Okada, 2019, p. 84)

One of Nenpuku's disciple was the Japanese Hidekazu Masuda (1911–2008) whose *haimei* was Goga. Goga arrived in Brazil at the age of 18, fell in love with the country and after a long period of contact and learning with Nenpuku sensei he started a big task: writing haiku in the Portuguese language.

In 1987 he founded "Grêmio Haicai Ipê", a group that has been studying and composing the three verses poem named *haikai* in the Portuguese language for 33 years. The group has monthly meetings in São Paulo (Brazil) and now is coordinated by Teruko Oda (1945–), niece and disciple of Goga, who has done a remarkable work on spreading *haikai* in Brazil.

Grêmio Haicai Ipê composes haikai inspired on Matsuo Bashô (1644–1694) School and the principal characteristics of Grêmio Haicai Ipê poems are

- ✓ 3 verses of 5/7/5 syllables
- ✓ Kigo
- ✓ Conciseness
- ✓ Suggestion
- ✓ Objective language
- ✓ Focus on the present time

More than one hundred years after the first immigrants' arrival in Brazil, thousands of Brazilians compose haikai. Haikai is present at some Brazilian schools and thousands of children participate in local Haikai contests and International Haiku contests as well.

Getting to know a little about the haiku practiced in Japan nowadays was an important experience for the research about Brazilian haikai.

By presenting a detailed description of haiku classes and meetings, we intend to offer to the readers the opportunity not only to acquire knowledge but also to get into the events' environment and feel the importance of poetry.

On a Saturday morning at Bashô Kinenkan - Tokyo, Takeharu Hikita sensei and his two assistants started a haiku monthly class with his 8 to 11 year old students. In a Japanese style classroom, children were sat down in a circle. On an annex room, their parents could watch and participate on the class, on an interesting interaction between the family and the learning process.

With a smile on his face, the teacher conducted the class on an informal way, getting the students' attention. The children received two beautiful colored sheets of paper with winter *kigo* images which were commented by the group.

The next step was a tour at the Kinenkan garden in order to look for winter *kigo* and get inspiration to compose poems. Children freely walked around the small but beautiful garden full of nature elements: momiji, kanguiku, tsubaki, matsu and many others. Matsuo Bashô (1644–1694) poems spread in the garden also inspired the students to write haiku.

Back to the classroom, the teacher spoke individually to some children, explaining the structure of the three verses of 5-7-5 syllables, the concise language of the poem, the kigo and other information about haiku composition. The next step was children's poems voting and selection.

After class, the children and also the parents made questions about Brazilian haikai practice and they were all very surprised with the number of Brazilian children

who compose haikai nowadays. Some Brazilian haikai books were also shared with the group.

The students were completely involved in the class. More than composing haiku and practicing the writing, they had the chance to get in contact with the Nature, learn about the winter *kigo,* exercise their choices and interpersonal communication, acquire perception, exercise self-knowledge during the poems voting and also creativity.

According to Merleau-Ponty (1908–1961), "The world is not what I see but what I live" (Ponty, 2018, our translation). The poetic practice expands the personal perception and the world perception as well.

The creative experience provides to the students self-development, transformation and growing. Fayga Ostrower (1920–2001) states that during the creative process "(...) we grow inwardly and expand ourselves to life" (Fayga, 2017, p. 28).

A creative experience was the haiku meeting with Nihon Dentou Haiku Kyôkai group. According to the coordinator Miyuki Ogawa sensei, the group belongs to the Association of Japanese Classical Haiku, which was founded sixty years ago by Takahama Kyoshi's granddaughter, Inahata Teiko (1931–).

The meeting started with a ginkô at Yamate Italian Garden. Ogawa sensei and some members of her group observed the beautiful garden and the buildings on a tour. Ogawa sensei pointed out to the group some winter kigo presented on the landscape with a sensitive eye for the Nature. After that, the participants were invited to write haiku among trees and flowers in the garden.

After that, the group walked around the streets of Motomachi to observe and appreciate the neighborhood. One of the haijin commented during our conversation: "Haiku can be composed in every place or situation.".

The haiku meeting started at 3pm on a beautiful Japanese style room in the Museum of Modern Literature. Eleven 50-year-old average women participated on the meeting on an harmonious environment.

Each participant wrote five haiku and my haiku were translated from English to Japanese by Ogawa sensei. The participants' haiku were mixed and five haiku were written on sheets of paper. The participants read all the papers and chose five haiku. From that five haiku, one was chosen as the best.

Ogawa sensei read all haiku, commented, suggested and corrected them. She gently observed the 5,7,5 metric, the kigo and the sensation that the haiku provided.

Fuyu no gogo
Kunakama machini
Santa wa yaneni

Winter afternoon
Haijin friends on the street
Santa Claus on the roof

This haiku was considered one of the best of the afternoon due to its originality and confirmed that haiku can be composed in every place or situation.

The haiku meeting of Nihon Dentou Haiku Kyôkai group has almost the same pattern of the Brazilian group Grêmio Haicai Ipê. The difference is the ginkô. Grêmio Haicai Ipê monthly meetings do not include the ginkô. The coordinator establishes three kigo to be studied by the group that must bring on the next meeting month, at least three haikai using them. The ginkô experience happens to Grêmio Haicai Ipê group one or twice a year, on special events of haiku composition, like the "Moon contemplation" that happens in April, during Brazilian autumn season.

It was possible to notice that Japanese keep the tradition of 5-7-5 syllables and kigo on the haiku composition different from other countries. Consulting the Kanagawa University library, we could find some American haiku books and the authors don't follow the 5-7-5 syllables and kigo rules from the traditional school. Sometimes a title is also used on the haiku.

The interest on Brazilian haikai is growing in Japan. Professor Rei Kufukihara founded in 2019 the Burajiru Kokusai Haiku Kenkyukai (International Brazilian Haiku Association). The association members also include Brazilian researchers.

On the December Association meeting (Tokyo) the haiku practice around the world was discussed and it was mentioned the variety of the poem composition in other countries like England and the United States. The book *Comparative studies on Season Words (Kigo) and Poetic Almanacs (Saijiki) in International Haiku* (Azuma; Fujiwara, 2012) also includes Brazilian haikai studies.

The subject requires a profounder research but the fact is that Japanese haiku seeds are spread around the world, sprouting different flowers.

Bibliography

AZUMA, Shoko; FUJIWARA, Mariko, Comparative studies on Season Words (Kigo) and Poetic Almanacs (Saijiki) in International Haiku. Japan, 2012.

MASUDA, Goga. *O haicai no Brasil.* São Paulo: Editora Oriento, 1988.

MENDONÇA, Maurício A. *Trilha forrada de folhas – Nenpuko Sato, Um Mestre de Haikai no Brasil.* São Paulo: Edições Ciência do Acidente, 1999.

OKADA, Mokiti. *Ensinamentos de Meishu-Sama vol. 5.* 6th edition. São Paulo: Fundação Mokiti Okada, 2019. (*Tengoku no Ishizue* – Japanese edition)

OSTROWER, Fayga. *Criatividade e processos de criação.* Petrópolis: Editora Vozes, 2017.

PONTY, Maurice M. *Fenomenologia da percepção.* São Paulo: Martins Fontes, 2018.

SATO, Nenpuku. Available at https://www.kakinet.com/caqui/nempukug.shtml. Accessed in February 1, 2020.

SATO, Nenpuku. *Nenpuku kushu I.* Tokyo: Kurashi no Techo, 1953.